

研究

經濟社會學と經濟學

早川三代治

將來、唯一の經濟學たるべきものは純粹經濟學であると言つたパンタレオーニの如き見解に従うとすれば、經濟學が純粹經濟學に純化された曉に於て如何なる研究領域が後に残されるであらうか。恐らく存在の學としての經濟社會學と當爲の學としての經濟政策學への二つの領域が残されるであらう。今此處では客觀的存在の學の領域のみを問題としよう。然るときは經濟現象或は經濟に關する學が純粹經濟學と經濟社會學とに一應分れることとなるが、此の兩者は一致するものであらうか。

或は一方が他方を包攝又は統一するような關係に立つものであらうか。恐らく大多數の社會學者、就中、フランス社會學派は社會學が經濟學を攝取すべきであると説くが、はたして社會學乃至は經濟社會學は純粹經濟學を攝取し得べきであらうか。此の點に私は疑問を持つ。經濟社會學と純粹經濟學とは何れも經濟に於ける諸事象間の相互關係を取扱うには相違ないが、併し對象乃至内容の相違、或は考察の焦點の相違、及び方法形式上の相違が兩者の間に存在する事は明らかである。簡単に言へば、認識の對象と方法とが異なる。従つて經濟社會學と純粹經濟學とは全く獨自

の別個の科學でなければならぬ。従つて又、經濟社會學が純粹經濟學を解消せしめ、或は攝取すべき理由が論理的に存在しない。何んとなれば、認識の對象及び方法が別個のものである以上、その獨立性が確認されるからである。

社會學の發展は所謂、特殊社會學の分化を擴大せしめた。而してその一つとして經濟社會學の成立が主張され、この特殊社會學としての經濟社會學に就て内容の構成が與へられつゝある。經濟社會學乃至其他の特殊社會學が独自の科學として成立することの可能なりや、其認識の對象及方法如何という問題は暫らく置いて、兎に角、種々なる特殊社會學が主張されている。例へばデアに依れば十數個の特殊社會學が擧げられている。斯る多數の特殊社會學への分化の傾向は他方に於てやがて各特殊社會學をして綜合的な一社會學の體系の下に解消或は包攝せしめんとする所謂綜合社會學へと向ひつゝある如くである。斯る立場に於ては、經濟學は經濟社會學として綜合社會學の中に吸収されることゝ考へられ、従つて綜合社會學の成立は唯だ一種の社會科學體系の成立を意味し、特殊社會學としての經濟社會學なく、又、獨立の經濟學なきことを意味する如く考へられている。

斯る傾向は是認さるべきであらうか。卑見によれば、特殊社會學の綜合としての社會學が成立するにしても、特殊社會學そのものは解消されず、又、經濟社會學はそれ自體として留まり、經濟學たるべきことはあり得ない。經濟社會學と經濟學とは依然として別個の獨立せる科學として留まるであらう。但し、從來の國民經濟學或は社會經濟學がそのまゝに留まるべしとは言ひ得ない。從來の經濟學が社會學従つて經濟社會學へ移讓すべき少なからぬ領域が存することは明らかである。併しながら、經濟學の總てのもの、或は最後のものまでが、社會學へ渡さるべきではない。従つて、經濟學が社會學的に改造さるべしという要請は經濟學の本質にまで及ぶことが出来ない。

各特殊社會學、例へば宗教社會學、法律社會學、經濟社會學等は二様の意味に解される。先づ方法より見れば、宗教、法律、經濟等の文化に對して社會學的方法を加えた認識の成果としての特殊社會學を意味し、次に、對象より見

れば、宗教社會、法律社會、經濟社會等の如き機能上より見たる一つの抽象としての部分社會に關する認識の成果たる特殊社會學を意味する。然るに何れの意味に考へるにもせよ、それが社會學たる限り、この二つの意味は形式と内容との不可分性に基づいて、不可分であらう。斯くて一つの抽象としての機能上の部分的社會の内部に現はれる諸々の文化現象に對して所謂、社會學的方法を加えるところに各特殊社會學が成り立つ。併し、是等の各特殊社會學は夫々異なる文化現象を對象としている。同一なる社會學的方法を加えるにしても、夫々の對象たる文化、即ち宗教、法律、經濟等はその文化價值を異にする。換言すれば、各現象は本質及び範疇を異にし、從つて各現象が社會との關聯に於て有すべき文化としての意味を異にする故に、同一なる社會學的方法たる「實證的方法」を用いるにもせよ、夫々の對象は異り、且つ夫々の特殊社會學が有すべき學の嚮導概念は同一たり得ない。例へば、宗教社會學と法律社會學と經濟社會學との間に我々はこれらを同時に満足せしめ得べき如何なる共通或は同一の嚮導概念を見出し得るであらうか。當然、宗教社會學も法律社會學も經濟社會學も、それが独自の科學たる以上は、夫々固有の嚮導概念を要請しなければならぬ。又、斯る独自の概念を把持することによつて夫々独自の科學たることを主張し得る。從つて夫々の嚮導概念は何れも他によつて規定されざる固有の概念でなければならぬ。然りとせば、斯る獨自にして固有の概念が相互に如何にして綜合され、又、それらの概念によつて嚮導される各科學が夫々の獨立を失つて綜合され得るであらうか。斯く考えれば、特殊社會學を解消せしめるが如き綜合社會學としての社會學は成立し得ないと言ひ得るであらう。

所謂、綜合社會學が諸特殊社會學の單なる「合體」でもなく、又、特殊社會學と併立する一般社會學でもなく、全く特殊社會學を綜合統一せる科學として如何にして成立することが出来るであらうか。宗教社會學が宗教學となり、法律社會學が法律學となり、經濟社會學が經濟學となり、斯くて諸特殊社會學が綜合されて唯一の綜合社會學となる

と爲すならば、それは恐らく唯一の社會科學の大成に外ならぬであらう。併し、斯る唯一の社會科學としての綜合社會學はたして事實に於て存立し得るであらうか。我々のはかの自然科學の長い歴史に於てすら斯る傾向を信ずることは出来ないのみならず、むしろ事實はそれと反對の歩みをなしたのである。各種の自然科學は存立する。併しながら斯る自然科學の綜合としての唯一の自然科學は存在しない。我々は抽象的に、或は名目的にのみかゝる「自然科學」を云々し得るのみである。即ち、物理學、化學、生物學、天文學等の各種の自然科學は存立するが、是等の綜合としての唯一の自然科學なるものは存立しない。我々が考へ得るものは、「自然」の本質を全體として見たる立場の「自然哲學」があり得るのみであり、然かも是れは最早や科學ではない。同様のことは我々の場合にも考へられるであらう。各種社會科學或は特殊社會學の綜合から唯一の綜合社會學は生れ得ない。社會或は社會現象の全體觀的考察は「社會哲學」又は「社會形而上學」の問題であつて、フランス社會學派の主張するが如き社會學的認識の問題ではない。斯く考へれば、「自然科學」に對應する意味に於て、綜合社會學を「社會科學」と呼ぶことを許すとしても、これに具體的な内容を盛ることは出来ない。従つて假りに一つの限界的概念として綜合社會學を認めるとしても、それは各種特殊社會學によつて始めて何等かの内容と意味とを持ち得べきものであり、従つて、斯る綜合社會學は全く形式的名稱であり、各種特殊社會學を解消せしめることも出來ず、又、是等を統一し得べき論理的基礎を有する科學たることも出来ないであらう。

以上の如く考へ來れば、經濟社會學を如何に見るべきかという卑見の骨子は既に明らかである。即ち、經濟社會學を綜合社會學に於ける一部分と見ず、換言すれば、社會學をば各特殊社會學の綜合としての唯一の社會學と見ず、従つて經濟社會學即經濟學と見ない。即ち、それとは反對に、特殊社會學としての社會學（嚴密に言えば所謂、形式社會學）を認め、更にそれに對する特殊社會學の一つとしての經濟社會學を認める。従つて一般社會學は各特殊社會學

の體系であると考え。斯くて卑見はシミアン、マックス・ヴェーバー或はゾンバルト等の見解と反對の立場に在ることとなる。是等の學者は經濟學より經濟社會學への昂揚、從つて經濟學の綜合社會學への解消を主張するが、併し、例へば Weber にいつて見るも、その “Wirtschaft und Gesellschaft” に於ける組織は何よりも先づ特殊社會學としての經濟社會學に屬すべきものであつて、それは從來の國民經濟學乃至社會經濟學でもなく、又、經濟社會學即經濟學の目標の下に再建さるべき綜合社會學中的一部分としての經濟社會學でもないということが出來よう。經濟社會學を以つて經濟學を止揚し得ない一例が此處に見られると思う。

併し、社會學を如何なるものと考えるにもせよ、經濟社會學の存立を疑うものはないであらう。但し、經濟社會學が如何なる性質及び内容を持つかについては社會學を如何なるものと考えるかという立場の相違によつて異なる。併し、既に述べたように、社會學を特殊社會科學と考え、更にその特殊社會學として經濟社會學を考える時、經濟社會學の問題は經濟に關する、即ち經濟的活動の爲めの社會結合の形態、その成立、作用及び結果を考えるに在る。從つてそれは經濟と社會との相互作用を考察することに外ならぬが、先づ經濟とその發達を可能ならしめる母胎としての社會の先行性が考えられねばならぬ。何んとなれば機能的に社會が經濟に先立つて成立しているからである。此の意味に於て經濟の前提としての社會が考えられねばならぬ。次に、斯る社會に發生する經濟性、從つて又、社會によつて經濟の受ける被制約性が考えられねばならぬ。而してこの被制約性は次の二重の事情の下に置かれる。

(一) 經濟とその發達とを可能ならしめるものとしての社會。この事情は次の過程の中に認められる。先づ社會が成立し、次いで經濟が成立する。社會並に經濟の發達は統制と協働の相互作用を生じ、社會的に從屬關係を生み、次いで階級關係を形成し、斯くて是等の社會關係の變化が經濟に變容を與へて來るであらう。

(二) 社會形態の夫々が經濟を決定する事情。即ち種々なる社會形態に從つて經濟の形態も亦、種々に制約される。

併し、相互作用はこれを以つて止まるのではない。種々なる社會形態によつて變化されたる經濟の形態が更に又、社會に及ぼす作用が考えられる。以下同様である。即ち、

(イ) かゝる經濟が直接に社會結合に及ぼす作用。

(ロ) 經濟が他の文化に及ぼす作用を通じて間接に社會結合に及ぼす作用。

が是れである。以上の如くして、或る制限の下に於ける（即ち、經濟を通じての）社會結合の考察がその基礎的内容を與へられるが、更に進んで經濟社會學は社會に於ける經濟的觀念形態の考察をも内容とするものである。例へば、經濟的價值、乃至は經濟的價值判斷、經濟的心理、集合的慾望等の事象、一般に諸思想に及ぼすべき經濟的變遷の影響等はそれが集合表象或は輿論事象として認識される限り經濟社會學の對象となるであらう。

さて斯る内容を有する經濟社會學は如何なる方法を探るものであるか。經濟社會學の一般に要請している方法は實證論的方法であり、その方法の規準は既にデュルケムに依つて論定されている處である。デュルケムの社會學的方法の公式はその對象の把持と對應している。即ち、社會學的認識は事物としての社會的事象に始まるが、結局に於て社會學の對象となるものは諸々の制度である。従つて經濟社會學の對象も亦、斯る方法的把持に俟つ處の諸經濟制度、従つて經濟社會であることとなる。換言すれば、經濟社會學に於ては個々の經濟社會的事象そのものではなくして、拘束作用を持つ社會的集合事象の諸制度そのものが考察される。此の對象は要するに「經濟社會」である。デュルケムの社會學的方法即ち實證的方法の基礎には斯る意味の對象の整理が重要な方法的位置を與えられている。

併しながら、斯る社會學的方法に就て一點の疑ひもないであらうか。デュルケム或は、シミアンは實證的方法即ち社會學的方法と考えているが、實證的方法は社會學の專有物ではあり得ない。それは科學の一般的方法である。従つて社會學が要請する社會學的方法というは、斯る科學の一般的方法としての實證的方法を、科學としての社會學も

亦要請するといふ意に解すべきであらう。それ以外に社會學にのみ固有なる實證的方法なるものは認め難いと思う。然りとすれば、科學としての社會學は「社會學的方法」なる固有或は特有の方法を獨占するものではない。従つて經濟社會學も亦、實證的方法に準據するとは雖も、獨自の社會學的方法を有するものではない。科學の一般的方法に従うのである。併し、斯く考えることは、社會學に於ける科學的方法を拒否し、従つて社會學の科學性を否定することではない。それが嚴密なる實證的方法に立つ限り、科學性を有することに疑ひはなく、従つて經濟社會學も亦、科學たり得る。

以上の如く、フランス社會學派の見解に従えば、社會現象に對して實證的方法を加えることによつて各種の特殊社會學、従つてその一つとして經濟社會學が成立し、又、是等を綜合することによつて綜合社會學が成立すべしという。然りとせば、方法については唯一の社會學的方法あるのみである故に、此處に成立すべき各種の社會科學を區別すべき規準は對象そのものに是れを求めなければならぬであらう。社會現象は種々なる現象、即ち宗教現象、法律現象、經濟現象等を包含している。而して是等の現象について夫々の社會科學、例へば經濟社會學が成立する。併し、他の一面から見れば、宗教、法律、經濟等の諸現象は既に自ら夫々に於て集合表象であり、社會現象なのである。換言すれば、社會學の對象たるべき是等の現象は個々の分離せる現象ではなくして、是等の現象の總體と考えられる集合表象である。此の點に關しては、經濟學も亦同様に、個々の經濟行爲を取扱はずして、夫等の總體を考察するものである。従つて經濟學が個人的心理現象を考察するといふ非難は妥當しない。併し、社會學に於ては夫等の行爲或は現象の社會關係、換言すれば社會結合の様式並に形態を考察の中心とする故に、拘束作用を持つ事象の廣義の諸制度を考察の對象とする。勿論個人的心理或は單獨なる事物の表象或は原現象への分析が社會學に於て行はれないと言ふのではない。例えば、制度としての宗教についてタブー或は呪咀等の心理的要素への分析を進めるが如きことは是れで

ある。併し一般的に言えば社會學の對象は廣義の制度であり、換言すれば、諸々の社會的結合或は社會關係であるといふことが出来る。而して經濟社會學は經濟社會制度、經濟的社會結合或は經濟的社會關係を對象とし、經濟的社會關係或は經濟社會制度が如何に經濟に作用するか、又従つて斯る作用されたる經濟が更に社會へ如何に作用するかを問題とするものである。それ故に、經濟社會學は經濟を與件と見て斯る一定の經濟の下に於ける社會が如何なる形態及び機能を持つかを考察するものとも考えられる。斯くて「經濟社會」とは抽象的概念であつて、經濟的社會關係の總體を現はすものである。而してこの「經濟社會」が經濟の機能を通じて「經濟社會」自體、従つて又、社會へ如何なる作用を及ぼすかを考察するのが經濟社會學の課題である。

前に一言せる如く、「經濟社會學」は二重の意味に解される。即ち「經濟」なる集合表象（社會現象）に對して社會學的方法を加へる學としての意味か、或は「經濟社會」を對象として是れに考察を與える（此の場合の方法も同様に實證的即ち社會學的方法たること勿論である）學としての意味かに解される。

而してその方法に就ては何れの場合に於ても所謂、實證的方法即ち社會學的方法であつて、兩者に差異は存しない。而して方法が科學の性質を決定するとせば、兩者共に社會學的方法に準據する故にいづれにせよ社會學たる事に變りはない。併し、對象について見れば如何。先づ「經濟」なる集合表象即ち社會現象としての、或は經濟行爲の總體としての「經濟」を對象とするとせば、經濟社會學は從來の經濟學と其の對象を同じくするものである。フランス社會學派の非難する從來の、或は現在の「國民經濟學」或は「社會經濟學」は何れも斯る社會現象としての經濟現象を取扱つて來たのである。經濟行爲の總體、従つてそれより生ずる經濟現象を對象とする限りに於て、經濟社會學は新なるものを經濟學に加えていないといふことが出来る。然らば經濟社會學の新しい使命は何處に在るのか。それは「經濟社會」そのものを對象とする處にある。換言すれば社會が經濟を通じて如何に社會自體を變容するかという問

題を取扱う處にその眞の領域がある。而して此の問題は經濟學が部分的には觸れたにもせよ、組織的には取扱はなかつた領域であつた。特殊社會學としての經濟社會學はこの独自の研究領域を固有の對象とすることによつて自己の基礎を安固たらしめることが出来る。

次に然らば經濟現象は如何なる科學の手に委ねらるべきであらうか。社會學は經濟現象が輿論事象であり、社會現象である故に社會學の對象であるとなす。勿論、それが社會現象であることには相違がない。併しながら、經濟現象には他の社會現象と異りたる固有の特性がある。即ち、經濟現象は「經濟的數量」として表現される如く、現象自體が數量的性質を内在せしめているのみならず、價格を通じて發現する社會現象である。従つて是れに社會學的方法即ち實證的方法の適用は或る程度までは許し得るも、究極に於ける現象の數量的本質及びかゝるものとしての現象間の相互依存或は因果關係を説明することは出来ない。例えば、需要供給の法則に就いて見よう。社會學は經濟學が輿論事象にして社會現象たる需要供給の關係を解き得ないという。併し、需要供給の關係の法則化は今日の純粹經濟學以上社會學は爲し得ていない。

思うに、經濟學の出發點たる對象は經濟現象たること言うを待たない。或は又、經濟現象の母胎たる總體としての「經濟」であるというも妨げない。而して此の經濟現象又は經濟が社會なくしては存在せず、又顯現されぬこと勿論である。従つて經濟學は經濟現象又は經濟を對象とするにしても社會との聯關を無視しているものではない。經濟學に於ては經濟が社會によつて制約される影響、換言すれば、經濟が社會を通じて經濟自體に影響する様態を考える。従つて又、社會を與件と見て、その社會に於ける經濟現象、即ち經濟的數量が價格を通じて各自相互に如何なる關係に於て變動しつゝあるか、換言すれば、經濟的數量の相互依存の關係を考究する。顧みるに、社會と經濟との關係を學的に把握するに二様の行き方が考えられる。その一は、社會を直接の對象として、經濟による社會の被制約性を考

察の中心とするものであり、經濟社會學となる。その二は、經濟を直接の對象として、社會に依る經濟の被制約性を考察の中心とするものであり、經濟學となる。然るに今若し此の兩面を同時に把握する科學の成立を考えるとせば如何。經濟社會學がその可能を充分に備えて、此の要請に副うが如くに見える。又、事實に於てフランス社會學派はその必要性も必然性をも固く信じている。併しながら經濟社會學の對象を「經濟社會」にありと考へ、經濟學は獨自なる「經濟對象」そのものを對象となすと考へるならば、此の兩者の間には劃然たる研究領域並に對象の相違あるのみならず、方法についても明確な相違が現はれて來る。斯くて經濟社會學はその科學としての内包と外延とを充分に充實し擴大するにしても經濟學を解消せしめることは出來ないであらう。又、解消せしめる要も存しない。一方に於て經濟社會學が確立統一され、他方に於て經濟學が純化されるならば、經濟社會學と純粹經濟學とが社會科學の獨自の種類として互に他を侵さず兩立し得るであらう。而して「經濟社會」と「經濟現象」とが夫々科學の對象として特異性が認識される限りは、この兩者を夫々對象とする科學の兩立は可能であり且つ必然であらう。科學の進歩するに應じて方法も變化するが、方法の進歩によつて科學の進歩することは一層、眞實である。我々はその最も顯著な一實例を純粹經濟學の發展の中に見出すのである。(終)